

五階の窓

合作の五

国枝史郎

青空文庫

「おやつ！」

と叫んだ長谷川の声がひどく間が抜けて大きかったので、山本は危なくコーヒー茶碗ぢゃわんをテーブルの上へ落とそうとした。

「おい、いったいどうしたんだい、大声が自慢にやあならないぜ」

「シエーネス・フロイラインが通るのだよ」

長谷川は窓へ飛んでいった。

「どれ」

と言うと、山本も長谷川の肩越しに窓外を見た。

雪が止やんだので人通りがある。

一人の娘が歩いていく。深くうつむいているとみえ、シヨールを抜いて頸脚くびあしが、少し寒そうに白々と見える。それが瀬川艶子であった。やがて人影に隠れてしまった。

「わが少女去りにけりか」

長谷川はテーブルへ帰ってきた。

「それだけの詠嘆でいいのかい」

椅子へ腰かけた山本は、ちよつと皮肉に言ったものである。

「探偵小説家としてはいけないさ。だが、ぼくは場合によつては探偵小説家なんか廃業したつていいよ、彼女さえぼくを愛してくれたらね」

「不心得だね、食えないぜ」

「なに、そうしたら新聞記者になる」

「ぼくのお株を奪うのだね」

「あつ、なるほど、そういうことになるか」

「探偵小説家でいたまえよ」

「探偵小説家でいる以上は、詠嘆ばかりしてはられないね。よろしい、ひとつ研究してみよう。彼女は動乱の渦中にいる、煩悶はんもんしていなければならぬはずだ。いや、今朝会った様子では、事実ひどく煩悶はんもんしていたよ。それなのにどうしたんだろう、暢気のんきらしく午後二時になると散歩している」

「だめだなあ、そういう見方は」

山本は大袈裟おおげさな身振りをした。

「あれだけ首をかしげていれば、暢気らしいとは言えないよ。そうして、ぼくの観察によれば、散歩などとは思われないね。目的があつて歩いていくのさ」

「いつたい、どんな目的だろう？」

「きみ、きみ、そいつが知りたいのかい。それは非常に簡単にできる。艶子きさんに訊けばいいじゃないか」

「だって、そいつは不作法だよ」

「ではもう一つ、尾行するほうがいい」

「紳士的でないよ、ごめんこうむろう」

「どうもね、きみが紳士にしては洋服の型が少し古い」

「日本じゅうの雑誌社へ怒鳴り込んでくれ、もう少し原稿料を上げるようになって。こう貧乏じゃあ流行は追えない」

とうとう笑いが爆発してしまった。

どんなに笑い声が大きかったか？ 『すみれ軒』のウエートレスたちがいつせいに二人を見たことによつて、充分想像されようではないか。

そこで二人は別れることにした。

一人になった長谷川は、やはり探偵小説家として必要な解剖と推理の中へ、没頭しながら歩いていった。

(時間と傷、時間と傷、問題は二つに局限されている。四時二十分から三十分の間に、西村は息を引き取っている。艶子が一撃を加えたのは四時五分ごろと認めてよい。艶子の一撃でできた傷が西村の肩の打撲傷だ。が、こいつでは死にっこはない、少女の腕力というものはその色目より微力なもので、まして得物が鈍器だとするとなかなか人は殺せない。もつとも西村は病気でもあって、艶子の一撃がそれに影響し、そのため息を引き取ったとすれば成立しないものでもないが、死体解剖の結果なるものが報告されていないのだから、どうもおれには見当がつかない。死体は解剖したんだらうか？　まずそれはそれとして、後頭部にあつた打撲傷なるものが問題とすればすべきだが……どこの騒ぎか、こいつが問題なのだ。だれだろう。後頭部を食らわせたやつは？　野田か、それとも将校マントの男か？　あるいはいまだに登場しない、全然別の人間か？　野田はすでに捕らえられている、警察のほうで調べるだらう。まだ登場しない人物だとすると、登場するまで待たなければならぬ。で、目下のところでは、将校マントの人間に嫌疑がいちばん深いというわ

けだが、わが優秀なる玄人探偵諸兄が、いまだに見つけないところをみると、どこかに上手に隠れているのだろう。上手に隠れているということがすでに怪しいといつてよい)

一時止んだ雪がまた降ってきた。

(将校マントの人間が舟木新次郎だと仮定するとさらに範囲は縮小されるのだが、年齢においてちよつと不合理だ、エレベーターが降りてきたときは、三十歳前後の人間に見えたが、冬木刑事と連れ立つてSビルディングへ行つた際、貼紙はりがみをして逃げていつたときには四十歳ぐらいの年とし恰好かつこうに見えた。もつとも、この時は着色眼鏡いろめがねをかけ、紳士風をしていたのだから変装といつてもよいかもしれない。ところで、本当の舟木の年は二十八、九だということだ)

18

雪がだんだん大降りになった。

(二十八、九なら三十には見える。しかし、四十には見えないはずだ。そこでまた変装とということになるが、変装して働くというような芝居ぎのある人間かしら? やつぱり、舟

木と将校マントとは別物と見なければならぬらしい)

どうやら吹雪になりそうであった。歩いている人もまばらである。

(聞けば舟木は主義者とやらで、一方で主義から西村を憎み、他方ではその姉のお蝶というのが西村の愛人になつてゐるのを遺憾に思つてゐたそうだが、そのお蝶という愛人などが関係してはいないだろうか？ 犯罪の背後には女あり！ その女が艶子だけだとみるのは不詮索ではあるまいかな。……さて、ところで艶子だが、自分の家の財産を西村に横領されたということを知つてゐたのではあるまいかな？ もしこいつを知つてゐたとすると、復讐ふくしゅうという観念がしぜん心に湧わかなければならない。復讐心を持つてゐたとすると、西村の恋を拒絶したことがいつそう合理的に解釈できる。が、しかし、それと同時に、彼女の立場は危険になる)

「おや！」

と、長谷川は呟つぶやいた。数間の前方に、雪を浴びながら艶子が歩いているからであつた。依然としてうつむいてゐる。

(ははあ、こうなると山本のほうがおれより観察すくが勝れてゐたわい。こんなに雪が降つてゐるのに、降つてゐるとも知らないように考え込んで歩いている様子は、決して暢気な散

歩ではない。目的があつてどこかへ行くのだ。どうもこうなれば非紳士的ながら、跡をつけざるを得ないなあ)

やがて賑にぎやかな街通りへ出た。

人もずいぶん通っている。

と、一人の薄汚い男が手早く艶子へ紙かみきれ片を渡した。

「あつ、こいつは怪しいぞ！」

長谷川は呟いたが、笑いだしてしまった。

(おれもこうなると探偵狂だよ、ひろめ屋がちらしを配ったのさえ、ものものしく見なければならぬんだからなあ)

ひろめ屋は彼へもちらしをくれた。

“十五銭均一、紳士の食べる洋食”

こう印刷がされてあつた。

“浮世はたいへん暮らしよくなつた。いまに見ている、十五銭均一で紳士の定食が食べられるから”

なにげなく裏を返してみた。

(これは驚いた、どうしたことだ！)

ちらしの裏に万年筆で、こんなように書かれてあったからである。

“きみが艶子をつけているように、ぼくはきみをつけているよ”

これには相当驚いてよい。

長谷川はじつと字面じづらを見た。

どうしたものか笑いだしてしまった。

(このトリックはもう古いや。外国の下手な探偵作家があきあきするほどくり返し、そうして日本の探偵作家が真似まねをしはじめたトリックだ。だが、手数はかかっている。だれかが——おれには分かっているが、とにかく艶子をつけているのだ。そうして、おれがつけているのが、ちよつと邪魔つけに思われるのだ。そこでひろめ屋を抱き込んだってわけさ。先回りをしてちらしをもらい、これだけの文句をしたためて、ひろめ屋のやつに小銭をくれ、自分はどこかに隠れていておれが通ったとき合図をしたものさ。そこで、ひろめ屋め、このちらしをおれに渡したというものさ。脅しておれに手を引かせよう、こう思ったに相違ない。だが、慌てて書いたとみえ、書体がちつとも変わっていない。まずい字だなあ、気の毒なくらいだ。こんなまずい字を書くやつは新聞記者以外にはありやあしない。……)

おれはどこまでもつけていくよ)

だが、そいつは失敗であった。

彼が字面を調べている間に、艶子の姿が見えなくなった。

そこは折悪しくおりあ十字路であった。

(おれに身体がからだ四つあるなら、四方に向かつて飛んでいくのだがどうもいけない、一つしかない。一つの身体をもてあましているのだ、四つもあつてたまるものか)

長谷川はそこで厳肅になった。

(しかし、結局おれという人間も、トリックに引つかかったというものだな。積極的には手を引かなかつたが、消極的には手を引いたんだからなあ)

尾行を断念することにした。止むを得ざるの断念なのである。

(艶子はちよつと奇麗な娘だ。だが、もちろんざらにある程度さ。悲劇の渦中で知つたので、印象深いというまでさ。大概の女は悲劇中に見ると、別べっぴん嬪に見えるから面白いよ。

ところで、こいつを喜劇中に見ると、それこそつと別嬪に見える。泣きつ面より笑い顔のほうがいいさ。いちばん困るのは中間性の面だ。言い換えると退屈の面なんだからなあ)

未練なくあとへ引つ返そうとして、ふと見ると巨大な建物があった。

(ああ、有名なK病院だな)

がらりと考えが一変した。

(彼女は病院へ入ったはずだ)

きわめて簡単な推理であった。字面の研究に費やして艶子から視線を離れたのは、わずか二分足らずであった。艶子がいないと気がつく、彼は十字路の四方を見た。ばらばらと人は通っていたが、艶子の姿は見えなかった。どこかへ寄つたに相違ない。

(病院へ患者を訪ねたのか、彼女が診てもらいに行ったのか、どっちみち病院へ行つたものとみれば、考え込んでいた彼女の様子がいつそう合理的になる。病院へ行くということは愉快なことではないのだからな。おれも病院へ行ってみよう。おれだってびんびん達者のほうではない、艶子の発見が無駄に終わつても、こんな機会を利用して健康診断をしてみらうのも、また大いによいことではないか)

門を入ると広い前庭で、玄関で一銭(当時の通貨の最小単位)のスリッパを借り、受付

へ行つたときである。

「こつちだこつちだ」

という声がした。

見ると、山本が招いている。

「いけねえ。こいつめ、おれより上手だ」

「無駄を言うなよ。黙つておいでよ、あとで詳しく説明してやるから」

幾筋かの廊下が通つていた。その一つを小走つていく。で、長谷川もあとを追つた。患者・看護婦・付添人・医者などが忙し^{せわ}そうに歩いている。廊下の天井がガラスなので、雪降りの日だがなかなか明るい。と、廊下が丁字形になった。それを左へ曲がつたとき、にわかにあたりが暗くなつた。ごーごーという音、しゅっしゅっという音、ぱちぱちとはぜる音！……べつに驚く必要はない。いくつかのレントゲンが、いくつかの部屋で活動をしているのである。

「見たまえ」

と、山本が囁いた。

「あそこに艶子がいるじゃあないか」

ドアの開いた部屋がある。やはりレントゲンの部屋とみえて、例の音が聞こえている。その横手に腰かけがあり、そこに艶子が腰かけている。

二、三人の人が開いた戸口から部屋の様子を眺めている。レントゲンの活動が珍しく、それで見ているに相違ない。

「ね、きみ、艶子はあの腰かけで人と待ち合わせているのだよ」

こう山本が囁いた。

「どうしてそんなことが分かるんだい？」

それが長谷川には不可解であった。

「艶子は診察券を買わなかったのだ」

「前に買って持っているのかもしれない」

「もし持っているなら受付へだね——うん、レントゲン科の受付へだ、少なくとも出さなければならぬはずだ。なるだけ早く出したほうが、早く治療をしてもらえるからさ」

「面会に来たんじゃあないかしら？」

「もし面会に来たのなら、すぐに病室へ行くはずだよ。ところが、艶子は病院へ入るとうろうろ廊下を歩いた末、あの腰かけへかけたのさ。それつきりちつとも動かないのだ。だ

れかにあの位置を指定され、それであそこへ行つたようにね」

「それはそうと、ぼくには不思議でならない。洋食屋のちらしを利用して、ぼくを引っかけたのはきみだろうが、どこにきみはいたのだい？　ちつとも姿が見えなかつたが」

「ああ、それか。なんでもないことだ。……おや！」

と、にわかには山本はびつくりしたように囁いた。

「見たまえ見たまえ、将校マントの男だ！」

かつてSビルディングのエレベーターから、ひよいと外へ飛び出した三十前後の上品な男が廊下の向こうからやって来た。

その男に寄り添いながら、非常にあだつぽい おおどしま 大年増おとどしまがそろりそろりと歩いてきた。

「あつ、驚いたなあ、お蝶つて女だ」

「へえ、あいつがお蝶なのかい？」

長谷川の好奇心は膨張した。

「殺された西村の愛人のね、舟木新次郎の姉に当たるね」

「どうしてきみは知っているんだい？」

「社でも警察でも張り込んでいるのだ、舟木が立ち回るに相違ないとね。ぼくも一度張り

込みに行つて、それであの女を知っているのさ」

一人の看護婦が向こうから来て将校マントの男へ挨拶あいさつし、そのままこっちへやって来た。

「ちよつとぼくは調べてくる。きみ、あいつらに気をつけてね」

山本は看護婦を追っかけていった。

お蝶と、そうして将校マントの男が艶子の前まで来たときである。ひよいと艶子は立ち上がった。三人で何か囁き合い、それから一緒に腰をかけた。そうして、熱心に話した。

(どうかして話を聞きたいものだ)

こうは思ったものの、長谷川は近寄っていくことが躊躇ちゅうちよされた。艶子に顔を知られているからだ。

呻うめくようなレントゲンの活動の音で、三人の話し声は聞こえない。

「おい」

と、その時、囁く者があつた。

振り返つてみると山本である。

「面白いことを聞いてきた。将校マントのあの男はね、昨日、入院したんだそうだ」

「なんていう名だい？ 舟木新次郎かな？」

「いや、まつもとまさお松本正雄おつていうそうだ」

「で、病名はなんなんだい？」

「それが非常におかしいのだ。入院するほどの病気なんか、持っていないということだ」

「ふーん、こいつはおかしいね」

「無理につければ神経衰弱、強迫観念とらに捉えられているそうだ」

「舟木新次郎じゃあないだろうか？」

「ぼくもそんなように思うのだ。……犯罪人の隠れ場所としては病院なんか絶好だからな

あ

「それに舟木の姉に当たるお蝶という女が会いに来た以上はね……」

「だがあの女、張り込みをまいてよくこんなところへ来られたなあ。……それはそうと接

近してみよう」

山本は三人へ近寄ろうとした。

「おい見つかるぜ、危険だぜ」

「あいつらの利用している情景を、逆用してやるのだから大丈夫さ」

「そりゃあいったいどういう意味だい？」

「将校マントの男はだね、入院しているから部屋を持っている。面会人の場合にはそこで話するのが普通じゃあないか。ところが、あいつらそいつをしない。というのには理由がある。一室にこもって密談すれば、かえって人に怪しまれるからさ。で、あの場所を選んだのさ。人通りがあつて、薄暗くて、レントゲンの音がゴ—ゴ—聞こえる。あそこでこそ話していればまずめつたには怪しまれないよ。安心して話しているに相違ない。そこをこつちで利用するのさ。ね、部屋の戸が開いているだろう。あそこで二、三人の患者がもの珍しそうに覗き込のぞんでいる。そこで、ぼくたちもあそこへ行き、レントゲンを見ているような様子をして立ち聞きしたら感づかれはしないよ」

そこで、二人はそのとおりにした。ちょうど部屋の前へ立ったときである。

「いらっしやったわ、職長さんが」

こういう艶子の声でした。

丸いあからがお赭らがお顔らがおで黒い髻ひげ、職長の名にふさわしい一人の男が廊下の向こうから、三人のほうへ歩いてきた。

「やあ。いらつしやい、榎本さん」

こう言ったのは将校マントの男だ。

「やあ」

と言うと、その男は腰かけへのっそりと腰かけた。

「おい」

と、山本が囁いた。

「西村工場の工員長、榎本順吉っていうやつらしいね」

「うん」

と、長谷川は囁き返した。

「あの四人、ぐるとみえる」

「目で見るなよ、耳だけで聞こう」

二人は熱心に聞き耳を立てた。だが、はつきりとは聞こえない。レントゲンの音が遮る

からである。そのうち突然、驚くべき言葉が榎本の口から飛び出した。

「きみたち三人揃そろっていると、やはり姉きょうだい弟は争われないなあ。よく似ているぜ、そっくりだ」

「ふーん」

と言ったのは長谷川である。

「あいつら三人姉弟なのか、では、いよいよ将校マントの男は舟木新次郎に定きまったね」
「艶子が二人の妹だとは、まったくどうも意外だったなあ。……おい、もう少し接近しよう」

どうも話が聞き取れない。何か榎本が言ったらしい。と、激げつ昂こうした将校マントの男の次のような声が聞こえてきた。

「ぼくじゃあないよ！ 断じて違う！」

「きみでなくてだれなものか」

これは榎本の声である。

すると、続いて女の声でした。

「この人はひどく短気ですけれど、まさかそんなことはしませんよ」

それはお蝶の声であった。

「そんな必要もなかったのですもの」

「だって、怨みがあるはずじゃあないか」

また榎本の声でした。

「三人姉弟の復讐ってやつさ」

「着々遂げられていたんですからね」

これもお蝶の声であった。

「あの人、人に殺されずとも、自分で首でもくくらなければ立ち行かなくなっていたんですからね」

「そいつも知っていましたよ」

これは榎本の声である。

「内では永年お蝶さんが絞って絞って絞りまくるし、外では最近この人がストライキを起こして攻め立てるし、事務所ではお艶ちゃんが澄ました顔をして、奇麗なところをちらつかせるし、大将だってふらふらしますよ。それに、業界の不況でね」

「艶ちゃんだけはかわいいそうですよ。……最近までそんなこと知らなかったんですもの」

これもお蝶の声である。

そのまま話し声は聞こえなくなつた。と、また榎本の声が出た。

「二千円を独り占めはひどかろうぜ」

21

「そいつもぼくの知つたことじゃあない」

激昂した将校マントの声だ。

「きみこそいちばんの悪党だぜ！」

「あるいはそうかもしれないね」

榎本の声はふてぶてしい。

「工員を煽動してストライキを起こさせ、そいつを種に社長を強請る。……きみのよう

な人間がいるからだよ、運動が途中で挫折するのは」

「二千円を出せよ、二千円を」

「知らないと言つたら知らないんだ」

「密告するぜ、きみの居場所を」

梶本の声は威嚇的である。

「言うがいいや、ぼくは平気だ」

「では、なぜこんなところに隠れているのだ」

「きみが隠れろって言ったからさ」

「きみに嫌疑がかかっているからさ」

「嫌疑をかけさせたのはきみじゃあないか」

「ぼくが警察で言ったことは、ありやみんなほんとのことじゃあないか」

「ねえ、梶本さん」

と、お蝶の声がした。

「持っていないと思いますよ、この人そんな大金はね……」

「だが」

と、梶本の声がした。

「後ろから殴ったのはきみだろうね？」

「いいや！……しかし！……しかしだね……」

この次の言葉は重大である。長谷川は思わず振り向いた。

「おや、あなた、長谷川さんね！」

艶子の声がつつ走った。突然、榎本が飛び上がった。

「あつ、来やがった、沖田刑事！」

青空文庫情報

底本：「五階の窓」春陽文庫、春陽堂書店

1993（平成5）年10月25日初版発行

初出：「新青年」博文館

1926（大正15）年9月号

※この作品は、「新青年」1926（大正15）年5月号から10月号の六回にわたり六人の作者によりリレー連作として発表された第五回です。

入力：雪森

校正：富田晶子

2019年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

五階の窓

合作の五

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 国枝史郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>